

エチオピア・エリトリア紛争 知られざる近代戦

# アフリカの角

著者 エイドリアン・フォンタネッラス  
トム・クーバー

翻訳 平田光夫

大日本絵画





# アフリカの角

エチオピア・エリトリア紛争 知られざる近代戦

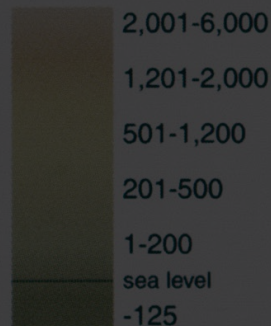
著者  
エイドリアン・フォンタネッラズ  
トム・クーパー

翻訳  
平田光夫

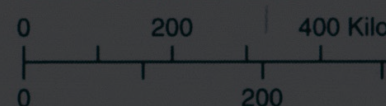
大日本絵画



Elevation (meters)



Boundary representation is not necessarily authoritative.





# 目次

Contents

## 序章

004

## 第一章

005

エチオピアの伝統的軍隊の衰退

## 第二章

017

ネグスからデルグへ

## 第三章

025

エリトリアとティグレの反政府勢力

## 第四章

037

1970～1980年代のエチオピア国軍

## 第五章

053

エリトリアへの反撃

## 第六章

061

レッドスター戦役の興亡

## 第七章

069

アフアベトへの道

## 第八章

081

ティグレをめぐる戦い

## 第九章

093

迫りくる厄災

## 第十章

101

デルグ滅亡とエリトリアの自由

## 第十一章

117

戦後の再建

## 第十二章

129

バドメ戦争

## 略語集

150

## 参考文献

151

## 著者紹介

152







エリトリアの首都、アスマラの中心部から2kmほど離れた位置にある「戦車墓場」。ここには30年間にわたる独立戦争で戦い、破壊され、置き去りにされた旧ソ連やアメリカ製の戦闘車輛が山積みになっている



# 序章

Prologue

知名度は低いが苛烈な戦いが繰り返された“アフリカの角”における紛争は、1980年代の大部分を通じ西側メディアで繰り返し報道されていた。エチオピア北東部の地方民が大規模な反乱を起こしていたのは明らかだったが、当時その敵は首都アディスアベバの「ソ連の支援を受ける体制」であると考えられていた。エチオピアにおける地方での反乱や軍事クーデターなどの政情不安の報道は昔からよくあったため、それ自体は何も目新しくなかったが、1980年代の戦争は、一部の記事が当時から指摘していたように、大規模な空軍戦力と機械化部隊が積極投入されていた点で明らかに異質なものであった。

1989年、ソビエト社会主義共和国連邦（ソ連）政府がエチオピア政府への支援打ち切りを発表すると、関連報道はほぼ途絶えた。それから2年も経たないうちに反政府勢力がエチオピア首都に突入し、政府を倒したという衝撃的な写真とニュースがもたらされた。その数年後、エチオピアとエリトリアが戦った大規模かつ激烈な戦闘に関して詳細に解説した書籍が何冊も出版され、そのなかには「オペレーション・レッドスター」といった勇壮な作戦名を書名に冠した例もあった。続いてインターネットが普及すると、今度は凄惨な戦場写真がこれでもかと数多く出まわり始めた。激戦が繰り返されたのが明白な荒野でソ連製の主力戦車や、その他の装甲車輛がことごとく破壊され、ねじ曲がり、燃え尽き、朽ち果てていたのだ。

エチオピアとエリトリアの大部隊同士が激突することとなった1998年の戦争は、20世紀最後かつ21世紀最初の従来型紛争であった。この戦いは過去最大規模で、ソ連/ロシア製の最新兵器が続々投入されたとか、ミコヤン・グレヴィッチ MiG-29やスホイ Su-27などの新型戦闘機同士が空戦をした、といった噂が広がり始めたのもこの頃だ。しかし、エチオピアとエリトリア間でふたつの大規模紛争が勃発した背景と、戦中に実際に起きていたのかは当時ほとんど不明なままだった。実際のところ、事態を注視していた外国人専門家の多くは、アフリカ大陸の最貧国とされていた両国に、報道されていたような規模と範囲の戦闘を実施することは不可能だと思い込んでいたのだ。

この見方がようやく変わり始めたのは1990年代以降で、特にファンタフン・アイルやゲブル・タレケといったエチオピア人研究者による信頼に足る書籍が出版されてからであった。両氏が

提示した、1980年代に着実に拡大しつつあったエチオピア軍がエリトリア独立の動きを阻止すべく数十年にわたって展開した大規模戦争の実像は驚くべきもので、従来のイメージを完全に超えていた。こうした書籍の登場により、いわゆるエリトリア独立戦争と近年呼ばれている1961～1991年の紛争では、対反乱作戦（COIN）、機械化部隊による砂漠戦、従来型の山岳戦といった、多様な形態の戦闘が行なわれていたことが判明したのだ。さらに分かってきたのは、この紛争では高い練度の指揮官率いる比較的装備の整った強力な部隊が、慎重に立案された軍事計画に従って作戦を実施することがよくあったという事実だった。

エチオピアは徐々に自軍を再建してきた時期に（特にエリトリアとのいわゆるバドメ戦争中だった1998～2001年の間）、荒廃したソマリアでの紛争にも巻き込まれているのだが、その結果、同国はアフリカ大陸有数の軍事大国であることが明らかになった。これは過去の戦争における活動を知るだけでなく、旧来からの伝統的軍隊とその戦歴が、現代のエチオピア軍ドクトリンへどのような影響を与えたかを理解することも、同様に重要であることを意味している。1935年のイタリアによるエチオピア侵略とその顛末のみに関して筆者があえて章を設けたのは、エチオピアの封建軍がどのように戦い、類似の戦術がいかに近年まで大きな影響を与えたかを示すためである。また外部からの支援が事実上無かったにもかかわらず、1980年代のエリトリアやティグレでの抵抗運動が極めて高度な水準にまで達しただけでなく、山岳地帯での機動戦における驚異的なスキルを生み出すに至った最大の理由が、こうした過去の戦訓を汲んだ戦術の存在だった。

本書は長年の、しばしば困難を極めた研究の集大成であり、その内容は多岐にわたる情報に基づいたものだ。アイルやタレケといったエチオピア人研究者による著作は、おそらくこれ以上ないほど重要である。一方で、こうした紛争に直接参加したエチオピア人たちによる証言といった新たな情報も時間の経過とともに収集できたのに加え、バドメ戦争については国際連合（UN）から大量の書類が公表されている。だがこうした資料の全てをもってしても、特にバドメ戦争については詳細が不明な点が依然として残っている。この謎を解き明かす鍵となるエチオピア空軍公文書館の所蔵資料は今なお一般公開されておらず、国内外で現在進行中の様々な情勢のしがらみのせいで、こうした現状は当分変わらないだろう。





1935~1941

## 第一章

# エチオピアの 伝統的軍隊の衰退

Sunset of the Traditional Ethiopian Military

第一次エチオピア戦争におけるティグレ州、  
アドワの戦い（1896年）を描いた絵画  
(National Museum of Ethiopia)

“アフリカの角”は戦略的に極めて重要だが、これはアフリカ北東部の隅に位置しておりアラビア半島に近く、インド洋とアデン湾、さらに紅海に面する海岸があり、大陸間の重要ルートをつなぐ港と飛行場が存在するためである。領土の北側と西側をスーダン、南側をケニア、東側をジブチと接するエチオピアはこの地域で最大の国だ。国土の半分以上を占めるのがエチオピア高原で、大地溝帯がこれを北東から南西に斜めに分断しており、その平均標高は海拔約1680mである。マイナス100mのダロール低地から南の中央高原の4000m級の山々にかけて、この高原には無数の川と深い渓谷が縦横に走っている。エチオピアの南部は幅40～60kmの地溝帯によって二分されている。道路網は現在も未発達で事実上無い地域も多く、原則的に6月中旬から9月まで続く雨季によって車輛交通はひどく妨げられる。その後まもなく乾季がおとずれるが、2月または3月に再び短い雨季がある。

1960～1980年代のエチオピアの総人口は2500～3000万人程度だった。宗教に関しては全体的に均質なものの、人々は民族的、地域的、政治的なグループによって深く分断されており、エチオピアはその全てを統一するために何世紀も苦闘してきた。建国の祖であるアムハラ族と、これに近いティグレ族はどちらもセム族の血を部分的に引く高地人で、全人口の約30%を占めている。彼らは主にエチオピア北西部の高原とアディスアベバ以北の地域に住んでいる。エチオピア中央部と南西部に多く住んでいるのがオロモ族で、牧畜と農業を営み、全人口の40%弱を占めている。エチオピア西部で最多なのがシャンケラと俗称される人々で人口の約6%を占め、東部と南東部で最多なのがソマリ族である。エチオピアで話されている約70種の言語のうち、大部分はアフロアジア語系のセム語派またはクシ語派の言語である。公用語のアムハラ語は総人口の半分以上によって話されるが、英語やアラビア語も話せる人も多い。

近年のエチオピアは高い自治権をもつ9個の地域州に分割されており、各州はほぼ民族グループに対応している。州にはティグレ、アムハラ、アフール、オロミア、ソマリ、ベンシャング・グムズ、ガンベラ、ハラリ、南部諸民族があり、南部諸民族州は約41もの異なる民族グループで構成されている。アディスアベバは最大の都市だが、その人口中「都市圏」在住者と分類できるのはわずか15～20%にすぎない。

エチオピア人は約40%がキリスト教徒で、その多くが大司教を頂点とするエチオピア正教という（1974年までエチオピアの国教であった）、エジプトのコプト正教と繋がり深い独自のキリスト教宗派の信者である。南部と東部ではイスラム教徒が多数派で、人口の約45%を占める。南部にはアニミズム信仰（いわゆる精霊信仰）者も多数存在する一方、ユダヤ教の一種を崇拝するベタ・イスラエルないしファラシャと呼ばれる人々の大部分が住んでいた。彼らはおそらく古代のアラブ在住ユダヤ人の子孫と思われるが、1991年にイスラエルへ空路移住している。

経済は農業関連の生産高に大きく依存しており、最も盛んな経済活動は牧畜で、これにコーヒー、木綿、砂糖、果物、野菜の栽培が続くが、それらの取引は地方市場での物々交換が大半である。その最大の理由は干ばつにより農業生産が激減することが多く、同国が日常食料品の輸入を繰り返し強いられてきたためである。

## エチオピア人の起源

エチオピアは最古でないにしろ、はるか昔から人類が居住してきた地域に位置する国である。考古学によれば、現代のホモサピエンスが進化したのはおそらくこの地だったという。今の国名の元となった名称を最初に使ったのは古代ギリシャ人で、それは古代のエジプト南部に住む人々を指す言葉であった。やがてその言葉は、20世紀初頭までアビシニアと呼ばれていた、より南方地域に住む人々に用いられるようになったのだ。

紀元前2世紀、セム語系民族がこの地にアクスム王国を建国した。時が経つにつれ、王国の領土はティグレ北部、エリトリア高地南部、紅海沿岸の一部にまで広がり、すなわち現代のエチオピアの基礎を形成したのだった。中央高原に位置するため他国の干渉を受けにくく、埋蔵されていた金、鉄、岩塩による富のおかげで、最終的にアクスム王国は当時の五大帝国のひとつにまで発展した。ギリシャ人聖職者によりキリスト教が同国に伝えられたのは西暦330年頃だった。それからの2世紀、アクスム王国はローマ帝国とインドとの大規模な海上貿易によって繁栄することとなる。これにより交易ルートとしての紅海的重要性は高まり、王国最大の港アドゥリス（現エリトリアのズラ）は貿易の中心地になった。その最盛期には現代のエチオピア、エリトリア、スーダン北部、エジプト南部、ジブチ、イエメン、アラビア半島南部までも支配下に置いている。

アクスム王国が大国として栄えたのは7世紀にイスラム教徒が台頭するまでであった。アクスム王国がムハンマドとその最初の信者たちを保護した義理もあり、イスラム教徒たちはアフリカへと勢力を拡大していく際も王国を滅ぼそうとはしなかった。しかしその間アクスム王国の海軍力は徐々に衰え、西暦702年にはその隙を見て同国の海賊がヒジャーズ（メッカとメジナがあるアラビア半島北西部の地方）を侵略したり、ジェッダ（中東有数の都市）を占領するようになってしまった。報復としてイスラム教徒はダフラク諸島をアクスムから奪うと紅海沿岸を占領し、王国を外界から孤立させている。8世紀にアクスム王国はベジャ族によって倒されたが、彼らは現代のエリトリア、ティグレ、スーダン北東部の大半を5代にわたる王朝で700年以上支配した。

中世になると3つの主要地域が確立された。北部のティグレ地方、中部のアムハラ地方、南部のショワ地方である。王朝はアムハラにひとつ所在するのが通例だったが、時には二、あるいは三もの王朝が併存することもあった。エチオピアが再び外界とのつながりを取り戻したのは、1528年になってからのことである。近隣のアドル・スルタン国からイスラム軍の侵略を受けると、「ネグス（王）」レブナ・デンゲル・ダウイトⅡ世はポルトガルに救援を求めた。イスラム軍がもう少しでエチオピアの古代王国を滅亡させ、全臣民をイスラム教に改宗させようとした寸前の1541年、クリストーヴン・ダ・ガマ率いるポルトガル遠征軍が到着し、同国を救っている。その後、このポルトガル遠征軍はエチオピアと、現在はソマリアに含まれる地域からの撤退を強いられた。

エチオピアとソマリアの対立の起源はこの戦いにあると考える歴史家は多いが、1528～1541年の戦いはイエズス会との宗教闘争を交えたエチオピア人領主間の激しい国内抗争も引き起こし、エチオピアはその後300年にわたってほぼ孤立状態になって





しまった。1855 年になるとリジ・カッサが自らを「ネグス・ネグスティ（諸王の王）」テオドロスⅡ世と称し、その治世下での国家統一の闘争を開始したのがエチオピア近代化と開国の幕開けである。冷酷な支配者だったものの、テオドロスⅡ世は当時アフリカに植民地を作ろうと押し寄せていたヨーロッパ人と、19 世紀にオスマン帝国の支配を退けた強国エジプトの歴代ヘディーヴ（藩王）からエチオピアを守っている。テオドロスⅡ世はヘディーヴに激しく抵抗して最終的にこれを撃退しただけでなく、アディスアベバに新たな首都を建設した。<sup>※1</sup> 1867 年、イギリスのヴィクトリア女王が国書に返信しなかったことに立腹したテオドロスⅡ世はこれを侮辱と受け止め、領事を含む何名ものイギリス人を拘束した。イギリスはインド・ムンバイから 1 万 2000 人規模の軍隊をエチオピアに派兵して、マダラ（今はアンバマリアムとして知られる）の戦いでテオドロス軍を破り、彼を自殺に追い込んだ。



1868 年のアビシニア遠征におけるイギリス兵の様子  
(National Museum of Ethiopia)

## エリトリアの台頭

テオドロスⅡ世の治世の終焉により国内権力闘争が巻き起こり、その勝者カッサがヨハネスⅣ世として皇帝に即位したのは、スエズ運河の開通により紅海周辺域が戦略的に重要になったのと同時期のことである。西洋の植民地主義国は紅海沿岸部の支配をめぐる政治的闘争を開始し、イギリスがイエメンを、フランスがオボック、アサース、イッサ（のちのジブチ）を占領した。1870 年になるとイタリアがその舞台に登場し、地方のスルタン（権力者）からアッサブの港を購入した。1888 年にイタリアは、スーダンのデルウィーシュ（イスラム神秘主義者）による侵略からエチオピアを守ることに気をとられていたヨハネスⅣ世の間を突き、2 万人もの軍隊を同国へ派遣することに成功。新参者と戦う気のなかった皇帝は紛争の大部分を交渉によって解決し、約

5000 人のイタリア人部隊を後年「エリトリア」として知られることになるエチオピア・ティグレ地方の一部に駐留させ続ける許可を下した。

1889 年 3 月 9 日、ヨハネスⅣ世はデルウィーシュの侵略軍に勝利したが、流れ弾が彼に命中し、麾下の部隊は退却した。同日夜に皇帝は死去し、その遺体は敵の手に落ちてしまっている。この知らせを知るや否や、ショワのサーレ・マリムはエチオピア皇帝メネリクⅡ世を自ら名乗った。そのわずか 2 ヶ月後、メネリクⅡ世はローマと条約を結び、小銃 3 万挺、弾薬、大砲数門と引き換えにエリトリアをイタリアに与えた。イタリアはこの条約によりエリトリアだけでなくエチオピア全土の保護国化が認められたと宣言しようと画策し、それに対しメネリクⅡ世は抗議したが完全に無視されたため、新たな戦争が始まった。以後のエチオピア・イタリア間の戦闘は 1896 年 3 月 1 日のアドワの戦いにおけるイタリア軍の屈辱的な敗北で頂点を迎え、アディスアベバで暫定講和条約が結ばれることになった。これによりローマはエチオピアの完全独立を認めざるを得なくなり、同国は国際的に独立国として認められた最初のアフリカ国家となったのだ。

この成功後、エチオピアは郵便制度、電話事業などの近代的なインフラの整備に莫大な額の投資を行なった。皇帝は官僚制を開始し、銀行が設立され、首都では最初のホテルが開業し、病院や学校が設けられていった。また紅海へのアクセスを取り戻そうとしたメネリクⅡ世は、ジブチの港とアディスアベバを結ぶ鉄道を建設するため、1897 年にフランスと条約を結んだ。<sup>※2</sup> この路線に最初の列車が走ったのはその 20 年後、1917 年のことである。

メネリクⅡ世が 1913 年 12 月に死去すると、彼の孫が後継者になったが、イスラム教徒との結び付きが強かったため支持を失い、その治世はわずか 3 年しか続かなかった。1916 年、彼はキリスト教徒のとする貴族により失脚させられ、その結果、メネリクⅡ世の娘にあたるザウディトゥが女帝となり、彼女のいとこのラス・タファリ・マコンネン（アドワの戦いの英雄の息子）が摂政兼帝位継承者となった。1930 年にザウディトゥ皇帝が死去すると、マコンネンは自身の軍勢を立ち上げ、権力掌握に乗り出した。内戦の終結後、彼はエチオピア皇帝ハイレ・セラシエⅠ世として即位している。

一方、エチオピア全土の掌握という当初の目論みを挫かれたにもかかわらず、イタリアはエリトリアにふんだんに投資をして道路や鉄道を建設し、近代的な農業、工業、教育、行政機構を導入した。こうした事業は困難以外の何物でもなかったはずである。開墾された土地は少なく（エリトリアの全面積のわずか 3 % 程度）、それ以外の天然資源や国内市場は全体的に極めて乏しかった。豊作の年でさえ、穀物はエチオピアの後背地からの輸入が欠かせなかった。当時のエリトリアで最も豊富な農産資源は家畜である。そのため、イタリアのエリトリア植民地統治機関は当初はエチオピアと友好関係を保っていた。地方交易の促進とジブチ経由で輸出されるエチオピア産品の一部を集めるため、1929 年に

1 エントト渓谷に建設されたアディスアベバは、メネリクⅡ世の国家再統一事業の一環として 1886 年に正式に首都に制定された

2 実際にはフランス企業による鉄道運営権は建設開始の 3 年前、1894 年に認可されていた。ジブチからディレダワ（ハラールから約 45km 離れた町）地点までの鉄道は、1902 年 12 月 31 日に完成済み



イタリアはハイレ・セラシエ皇帝と条約を結び、アッサブ港にエチオピア産品のための自由交易地を認可させている。これに伴いアッサブとエチオピアのデシエを結ぶ道路が建設された。

当時キリスト教徒とイスラム勢力が拮抗し、深く分断されていたエリトリアで徐々に植民地を形成していたイタリア人は、現地人で構成される部隊を編成できるまでになった。1934年時点で、この植民地軍はソマリ族を除くエリトリア人イスラム教徒を主とする正規部隊2個師団と、多くの準正規兵部隊を編成できるまでに成長している。エリトリア軍団に第1および第2エリトリア師団として編入されたこれらの師団と各種補助部隊は、1935年10月に火蓋が切られたイタリアによるエチオピア侵略、すなわち第二次エチオピア戦争に参加するのだった。

## エチオピア軍の近代化

1896年3月のアドワの戦いでエチオピアがイタリアに勝利した最大の理由は、テオドロスⅡ世やヨハネスⅣ世、メネリクⅡ世といった皇帝たちがエチオピア国軍の近代化を邁進していたからに他ならない。特にテオドロスⅡ世は何人ものヨーロッパ人を雇って鋳物工場を建設し、曲射砲を国産化しようと努力している。こうした試みの大部分が失敗に終わっており、どれも長続きしなかったものの、メネリクⅡ世は同様の事業を改めて試み、ついに近代的な山砲を製造することに成功した。これに伴い彼は正規部隊である砲兵隊を創設し、少なくとも1名のヨーロッパ人を招聘してアディスアベバに工房を設け、小火器用の弾薬を製造させるとともに、ほとんどの小銃と火砲の整備ができる体制を整えた。1907年に入るとメネリクⅡ世は国防省を設置している。

にもかかわらず将来皇帝となるハイレ・セラシエの下に、軍服を身にまとい近代火器を装備した常備部隊がようやく登場したのは1917年になってからであった。また、セラシエは自軍の青年軍人を教育するため、フランスのサンシール陸軍士官学校に派遣している。1928年にエチオピアへと帰国すると、彼らは帝国親衛隊に配属された。その1年後にはベルギー軍事使節団が発足し、1935年までエチオピアに留まっている。その一方で、エチオピアと利害関係のない外国勢力からの支援獲得も精力的に進められ



1930年代の典型的なオロモ族戦士。(National Museum of Ethiopia)

ていた。セラシエはさらに多くの士官候補生をフランスに送って訓練させ、1934年にはスウェーデンに支援を要請。同年スウェーデンから小規模な軍事顧問団が到着し、ホレタ陸軍士官学校の設立に協力した。このような努力の結果、帝国親衛隊は1933年の2250人から、1935年には士官および下士官兵5000人からなる4個大隊編成となり、1個機関銃中隊、1個騎兵中隊を有するまでに拡大された。自軍のさらなる増備を目論むセラシエは、偵察と連絡任務に使える航空機を装備した小規模な航空隊を創設しようと動いていた。<sup>※3</sup>

## 1930年代のエチオピア軍

エチオピアという国家を再編して近代化しようとする歴代皇帝の努力は確かに意義はあったものの、実を結んだものはごくわずかで、こと1930年代のエチオピア軍に関しては全く成果なしというのが実情であった。当時のエチオピア軍は従来の慣習どおりに編成された皇帝直属の軍勢、マハル・サファリ（これは近代的な武器の恩恵を一応受けている唯一の部隊でもあった）と、各種の貴族（ラスと呼ばれる諸侯が最も有力だった）が先祖代々維持してきた無数の部隊からなっていた。この軍隊は大部分が歩兵によって構成されていたが、主にオロモ族から引き抜かれた軽騎兵隊も含まれていた。その動員方式は数世紀前の封建時代のヨーロッパとほぼ同様で、こうした組織は比較的短期間に数十万人の兵士を招集できるのが長所である。

戦場に配置されると、初期のエチオピア帝国陸軍は1個の前衛部隊、2個の側面部隊、そして本隊へと分割されるのが常だった。進軍の際、これらの部隊はさらに1個の前衛部隊、本隊を分割した2個の側面部隊、支援部隊、後衛部隊にそれぞれ分けられた。時代を経るうちに、フィタウラリ（前衛部隊の指揮官）、カグナスマック（右翼部隊の指揮官）、グラッスマック（左翼部隊の指揮官）、アスマック（後衛部隊の指揮官）などの土着的な軍事階級が発達していった。

エチオピアの軍隊の戦略は、大勝負となる戦闘を探し求める決戦主義に礎をなし、そこで極めて効果的な独自の戦術をもって一気に敵を撃滅するというものだった。前衛部隊で速やかに敵軍との戦端を開くと、その側面を衝いてから、最大の弱点を総攻撃する、というのがその戦術の定石である。総攻撃においてエチオピア兵士は、敵との距離を詰めてから白兵戦に持ち込むようにしており、そのためライフルで武装した部隊であっても盾と短剣を携行していた。エチオピア軍の歴史は世界最古のもののひとつで（その起源は紀元前1世紀の阿克苏ム王国の黎明期にまで遡れる）、その後も戦いが絶えることがなかったため、兵士らは戦意旺盛で非常に好戦的だった。19世紀末から20世紀初頭にかけてエチオピア軍の戦いざまを目撃した外国人たちは、その規律、組織、戦術をヨーロッパ各国の軍隊と比較せずはいられなかった。例えば19世紀にエチオピアを旅したドイツ人旅行家ゲルハルト・コールフスはこう記している。

「この原始的な軍隊の規律が優秀なことは認めざるをえない！」

同様に1896年のアドワの戦いに参戦したイタリア軍司令官のひ





とり、エレナ准将はこう回想している。

「アビシニア※<sup>4</sup> 人の戦術は見事である。兵士たちは見事に統率され、勝機ありと確信すれば必ず攻撃する。弱点を衝いてくる彼らの機動は、その素早さゆえ阻止は不可能である。」

しかしエチオピアの軍隊の封建的な組織体制、戦略、戦術には欠点も多かった。軍は領主への忠誠心に大きく依存しており、また部隊ごとに装備の充実度に差があったため、質的にムラのある軍隊になっていた。そして最大の問題は極めて原始的な兵站システムにあり、さらに指揮官の戦術的自由度も軍の組織構成により大きく制限されてしまっていた。アドワの戦いではエチオピア式の戦術が功を奏したが、短所を見るとエチオピアの指揮官たちが長期戦において、柔軟な策を取れないことを意味している。例えば火力の劣勢を塹壕構築で補うという戦略は、兵士たちの士気を損なうことが判明した。同様の理由により、ゲリラ戦に最適な地形でありながら、エチオピアの軍隊は組織的な抵抗戦を実施できなかった。特にゲリラ戦などに代表される遊撃戦法は、威風堂々と戦うことを重んじるエチオピアの伝統的軍隊のエリートには到底受け容れられなかった。ラス・セユムはこう公言している。

「……ネグス・ネグスティ・ヨハネスの子孫は戦はするが、シフタ（盗賊）の首領のような戦い方はできぬ！」

エチオピアの伝統的軍隊のもうひとつの欠点は、封建制度は大規模な軍勢を動員することはできても、その全てを長期間戦場に展開させ続けるのには非常に不向きであることだった。なかでも徴募された兵士は負け戦が続くと、たちまち戦意を喪失してしまった。

1930年代のエチオピア軍の最大の弱点はおそらく、その乏しい装備にあるだろう。当時のイタリア軍の諜報報告書によると、その武装は数十年前の型も含む、メーカーも型式もバラバラな40万挺ほどの小銃の寄せ集めだったが、約2000挺の軽または重機関銃もあった。しかし火炮となると、その数はわずか234門で、40年前にアドワで鹵獲された旧式砲や先込め式の青銅砲も少なくなかった。近代的な火炮としてはエリコン FF 20mm 対空砲、ストークス迫撃砲、数門の PaK 36 3.7cm 対戦車砲があったが、無きに等しい保有数だった。他にはフィアット 3000 軽戦車（イタリアでライセンス生産されたルノー FT-17）が数輛と、今日「テクニカル」と通称される、機関銃をトラックの荷台に搭載した即製戦闘車輛が数台あった。ただし1930年代のエチオピアには、これらの兵器に用いる弾薬を大量生産できる工場がまだひとつもなかった。

3 エチオピア空軍史の詳細については発売中のアフリカ@ウォーシリーズ18巻、オガデン上空の翼（英語版のみ刊行中）を参照

4 アラビア語での呼称に起源をなすエチオピアの旧名

5 注目すべきは、戦力1万3200の2個のエリトリア人部隊が火力ではイタリア本国軍に劣っていたにもかかわらず、旺盛な戦意と山岳地帯での機動力によって非常に活躍したことである。さらにイタリア軍士官はそのおかげで本国部隊の犠牲者も減ることに気づき、エリトリア人部隊を強襲部隊に多用した

## イタリア軍の戦力整備

植民地を拡大するべくイタリアは1935年2月にエチオピア侵攻を宣言し、第24ガヴィナーナと第29ペロリターナの2個歩兵師団をイタリア領ソマリアに派遣した。それ以前に行なわれた西洋諸国のアフリカ派兵とは対照的に、このエチオピア侵攻では莫大な戦資金が投じられている。国家ファシスト党の指導者であるベニート・ムッソリーニは、配下の将軍たちにアビシニア戦役を有利に進め、アドワの戦いの二の舞を絶対に避けるために必要と判断されたあらゆる手段を提供する意向であった。この派遣軍の司令官、エミール・デ・ボーノ大將が本作戦に10万の兵力を要求したところ、ムッソリーニはこう答えた。

「貴官には30万の兵力、さらに航空機300～500機と快速戦車300輛を与えよう！」

同様に、イタリア軍の兵站準備も徹底したもので、マッサワ港は拡張され、3万人もの労働者によってアスマラまで全長120kmの道路が建設された。実際、1935年の8月中旬までに合計1700kmもの道路が作られ、それ以外にも既存の道路3000kmと鉄道が10万人規模の大労働者部隊によって改修されている。さらに数十本もの井戸が掘られ、多数の物資集積所が設けられると、侵攻支援用の大量の物資で満たされた。その後、侵攻作戦が最高潮に達した時点でエチオピアに展開していたイタリア陸軍は16個師団にまで増えていたが、それには表1に示したようにエリトリア人で構成されたエリトリア師団2個と、黒シャツ師団6個も含まれていた。

表1：イタリア軍主要部隊の戦闘序列（1936年1月）※<sup>5</sup>

エリトリア北部戦線	
第1軍団	第4黒シャツ師団「1月3日」 第5山岳師団ブステリア 第26歩兵師団アッシエッタ 第30歩兵師団サバウダ
第2軍団	第3黒シャツ師団「4月21日」 第19歩兵師団ガヴィナーナ 第24歩兵師団グランサッソ
第3軍団	第1黒シャツ師団「3月23日」 第27歩兵師団シラ
第4軍団	第2黒シャツ師団「10月28日」 第5黒シャツ師団「2月1日」 第5歩兵師団コッセリア
エリトリア軍団	第1エリトリア師団 第2エリトリア師団
南部戦線、ソマリア	第6黒シャツ師団テヴェレ 第29歩兵師団ペロリターナ 歩兵師団リビア

上記の師団のほかにはイタリア軍は「ドゥバート」と通称される各種の準正規部隊による増強を受けていたが、これには地元住民、特にソマリ族が多く徴募されていた。その数は計2万5000人から3万人に上った。さらにイタリア軍は1935年10月1日までに自国兵16万1700人と植民地兵5万3200人をエリトリアに集結



させたが、これには火炮 580 門、豆戦車および装甲車約 400 輛、車輛 3700 台の支援が付いていた。加えて火炮 117 門を伴う正規および準正規の植民地兵 2 万 9500 人を含む 5 万 3850 人の部隊がソマリアに配置されている。イタリア空軍はというと、航空機 132 機をエリトリアに、76 機をソマリアに集結させ、その内訳は 54 機が近代的なカプロニ Ca.101 および Ca.11 爆撃機、83 機がメリディオナリ Ro.1 偵察機、27 機がメリディオナリ Ro.37 とフィアット CR.20 戦闘機というものであった。

## 緩慢なファシストの大攻勢

イタリア軍の攻勢は 1935 年 10 月 3 日に始まり、多数の部隊が 3 本の主進撃路に沿ってティグレに侵入した。第 1 軍団はセナフェからアディグラトとメケレへ、エリトリア軍団はメケレをめざしてエンティチョからハウゼンへと進み、第 2 軍団はアドワ—アクスム—インダセラシエ（近年はシレと呼ばれる）を結ぶラインを確保した。進撃当初は目立った抵抗は皆無で、翌日にはアドリガットが占領され、続いて 10 月 6 日にアドワが、15 日にアクスムが陥落した。イタリア軍が大規模な抵抗を受けたのはアドワのみで、そのエチオピア人兵士たちを率いていたのがラス・セジウムである。彼らはイタリア軍に攻略されかけたため、最終的には退却を強いられている。この衝突による死傷者はエチオピア側が 400 名近くで、イタリア側が 35 名だった。その数日後、ティグレ州の有力貴族ハイレ・セラシエ・ググサがエンティチョで麾下の兵士 1200 人とともにイタリア側に寝返った。これはイタリアが大いに期待していた動きであったが、貴族間で激しい対立抗争があったにもかかわらず、エチオピア勢力の背信は戦役の全期間を通じてググサの一例のみに留まっている。

やがてイタリア軍の進撃は大幅に減速した。最大の理由はエチオピア人の抵抗ではなく（これは比較的低調なままだった）、険しい地形に阻まれ、さらには舗装道路が少ないせいで、イタリア軍が直面していた兵站問題が深刻化し続けたためだった。そのうえエミーリオ・デ・ボーノ大將はエチオピア軍の反撃を警戒するあまり、極めて慎重だった。実は、ヨーロッパ人の優越性を唱えるファシスト党の激しいプロパガンダにもかかわらず、アドワで敗北を喫した挫折感はイタリア軍士官の心にまだ存在し続けてい

たのだ。結局、こうした状況に激怒したムッソリーニはデ・ボーノ大將を左遷し、ビエトロ・バドリオ元帥を作戰の総指揮官として新たに任命。バドリオは進撃を再開し、1935 年 11 月 8 日にメケレを占領することに成功した。

一方、イタリア軍の進撃が遅々として進まなかった隙に、多数のオーストリア人、キューバ人、アイルランド人、フランス人、ロシア人、スイス人、トルコ人、アメリカ人の義勇兵がエチオピアを救おうとやって来ることができた。なかにはまともな軍事知識を持たない単なる冒険者もいたが、それ以外は非常に経験豊富な士官であった。例えばトルコ人のメフメト・ヴェヒブ・パシャ將軍はガリポリ戦役での第 2 オスマン軍の元司令官で、トルコ軍士官 2 名を引き連れて到着している。彼はハラール地区での戦闘で重要な役割を果たすことになった。アメリカ人義勇兵の大半はアフリカ系アメリカ人で、彼らは軍事顧問やパイロットとして活躍した。

## エチオピアの反撃

1935 年 12 月にはエチオピアは自軍の動員を完了し、最初の大規模反攻を開始した。特にラス・イムルと麾下の「左翼の軍」が行なった攻撃は反攻作戦として最も大胆なものだった。2 万 5000 人からなる彼の部隊はゴジャムに集結後、インダセラシエに向かって 960km 以上行軍した。この間、イタリア軍偵察機に発見されたラス・イムル隊は空からの攻撃にさらされ、航空攻撃の威力を目の当たりにしたことがない戦闘員の間にパニックが起り、その半分近くが逃亡している。しかし踏み留まった者たちは分散したり物陰に隠れたりすれば空爆の効果を減らせることにすぐ気づいた。さらに隊長たちは、一部の隊に反対の方向に進むよう命じて飛行機に対する囃にし、イタリア軍機の注意を逸らした。こうして「左翼の軍」は伸びすぎていたイタリア第 2 軍団の側面を衝き、インダセラシエ地区に無事入った。

12 月 15 日、ラス・イムルの兵力 2000 人の先鋒隊（指揮官はフィタウラリ・シフェラウ）は一晩の行軍後、テケゼ川を渡りデンベギナ峠を攻撃した。この陣地に布陣していたのはルイージ・クリニティ少佐率いる大隊規模の植民地部隊、バンダ・アルトピアニで、9 輛の CV.33 豆戦車で補強されていた。シフェラウ隊の兵



機関銃を装備したエチオピア帝国親衛隊の部隊。エチオピア軍組織において軍服を支給されていたのは、1930 年代半ばの時点では彼ら帝国親衛隊のみであった。（National Museum of Ethiopia）



イタリアの黒シャツ隊。1935 年 12 月中旬、メケレにて。（NME）





士はイタリア軍陣地を素早く包囲すると、装甲車輛を全て破壊した。クリニティ少佐はかろうじて離脱したが、部隊の半数近くを喪失。エチオピア側の損害も大きく、先鋒隊の指揮官であったシフェラウも戦死したのだが、「左翼の軍」は作戦を続行し、数日後にはアクスムから移動中だった黒シャツ隊の車列を待ち伏せ攻撃して豆戦車を全滅させている。その後、ラス・イムルは麾下の部隊を二分割し、約 8000 人をアフガガ峠付近に残したまま、ラス自身が率いる残りの部隊をアディアボ砂漠の反対側、エリトリアのアディクアラへと急行させた。この移動により、イタリア第 2 軍団の補給線と後方の物資集積所が分断される恐れが生じることとなった。

この脅威を減らすため、第 24 歩兵師団がアフガガ峠を 12 月 25 日に攻撃したが、成功しなかった。切羽詰まったバドリオ元帥は空軍による化学兵器の使用を容認し、マスタードガスを使用した最初の空襲が 1935 年 12 月 22 日に実施された。攻撃されたのはラス・イムルの隊列で、被害は甚大だった。死者が数十名出ただけでなく、生存者もパニックに陥り戦意を失ってインダセラシエへ撤退し、「左翼の軍」の快進撃はここに終わった。この時からイタリア軍はマスタードガスを多用するようになったが、以下はあるエチオピア軍指揮官が第二次テンビエン会戦ののち、その威力の恐ろしさについて記したものである。

「空襲が最高潮に達すると、我が兵の多くが武器を取り落とし苦悶の叫びをあげ、拳で目を擦りながら膝から崩れた。目に見えない殺人ガスの雨が我々に降り注いでいたのだ……。どれだけ多くの兵がその日（1936 年 1 月 23 日）だけで失われたのか、あえて私は考えないようにしている。ガスは平原と森を汚染し、少なくとも 2000 頭の動物が死んだ。ラバ、牛、羊と、多くの野生動物が苦痛に正気を失い、崖に突進すると谷底に身を投げた。翌日も、その翌日も、そのまた翌日も、イタリア軍機は我が部隊にガス攻撃を繰り返した。彼らはわずかな動きも見逃さず、どんな場所にでもガス弾を投下した。」

ウォレダ・カッサもこう記している。

「彼らはマスタードガスをまるで雨のように撒布した。毒は馬も、ラバも、人も、同じように蝕み、その死は火葬で締めくくられた。かくして我々の戦いは非常に困難なものとなった。」

やがてエチオピア人は化学兵器の効果を減少させるには丘に登り、谷に溜まりがちなガスの上に出れば良いことを学んだ。さらに彼らは 105mm 砲弾から出るマスタードガスが、イタリア軍爆撃機から投下される C.500T 爆弾のものより効果が低いことも知った。後者には 1 発あたり 220kg ものマスタードガスが充填されていたのだ。一方、化学兵器が相当の戦果を上げたとはいえ侵略作戦に明るい見通しは立たず、バドリオ元帥はムッソリーニに増援部隊を要請せざるを得なかった。その結果、第 5 歩兵、第 5 山岳、第 26 歩兵の 3 個師団が新たに動員され、海路エリトリアに送られた。これらの増援の到着により第 4 軍団が 1936 年 1 月に編成



1935～1936 年のエチオピア侵攻時に投入されたイタリア王立空軍の Ca.133 爆撃機。(S. N.)



1936 年の第二次エチオピア戦争で使用された大型爆弾を取り囲むイタリア王立空軍のパイロットと地上要員。(Wikimedia Commons)



ヴェヒブ・パシャ将軍（中央）と副官たち。(Wikimedia Commons)



可能になり、同軍団がインダセラシエ地区を占領確保したことでイタリア軍の諸基地の守りが安定した。

その頃、ある黒シャツ部隊がワリュー峠という重要地点を占領したが、これはティグレ州に入る要衝のひとつ、ホーゼンから約30kmの場所だった。イタリア軍は前進を続け、1935年12月18日にアビアディを占領することに成功。約1万人のエチオピア人兵士が逆襲してイタリア陣営を峠まで押し返したものの、そこから完全に排除することはできなかった。その後、数日間かけて両軍の増援部隊がこの地区へ集結し、1ヶ月後の第一次テンビエン会戦へと繋がっていくことになる。

戦いが始まったのは1936年1月20日、4個黒シャツ大隊で補強された第2黒シャツ師団がアビアディへの進撃を再開した時だった。敵の戦力と士気を過小評価していたイタリア軍は虎の尾を踏んだだけの結果となり、あっという間に猛烈な反撃にさらされた。出発地点へ戻るまでに少なくとも2個大隊が大損害を被り、イタリア人士官の半分近くが戦死している。エチオピア軍は続いて峠に総攻撃をかけ、これにより第2黒シャツ師団はほぼ総崩れになった。イタリア人司令官がメケレへの撤退を思案していたところ、第2エリトリア師団が救援に駆けつけた。1月23日に化学兵器攻撃と同部隊の反撃が組み合わさった結果、峠を守るエチオピア軍は大損害を出して退却を強いられた。それまでにイタリア軍では士官60名、自国兵605名とエリトリア兵417名が戦死していた。

## バドリオ元帥の猛攻

1936年2月上旬、エチオピア北部にいたイタリア軍は4個軍団の指揮下に11個師団を有していたが、その大部分の7個はメケレ地区に集中配置されていた。これはバドリオ元帥がメケレを起点にラス・ムルグエタ率いるエチオピア中央軍団に総攻撃を実施しようと決断したためだった。中央軍団の約半数はアンパアラダムに集結していたが、そこは面積50平方kmの台地で、デシエに進軍するには避けて通れない要衝である。攻撃の下準備として、イタリア軍は同地区を280門の火砲の砲撃と数百回に及ぶ空爆で



エチオピアに向けて進軍するエリトリア軍団のアスカリー騎兵隊  
(National Museum of Ethiopia)

念入りに攻撃した。砲兵隊はアンパアラダムだけでも1367発以上の105mmマスタードガス弾を撃ち込んでいる。

総攻撃が始まったのは1936年2月10日で、第1および第3軍団がアンパアラダムを二重包囲する形で攻撃を開始した。これに対しエチオピア軍は素早く後退すると数度にわたって逆襲したが、乏しい戦果に対し損害は甚大だった。こうしてイタリア軍は進撃を続け、2月15日に台地の真ん中に軍旗を掲げた。エチオピア側の損害は壊滅的で、兵士8000名が戦死しただけでなく、ラス・ムルグエタ自身も数日後の空襲で命を落とした。にもかかわらず数千ものエチオピア兵が難く脱出できたのは、イタリアの第3軍団が包囲網を閉じるのにもたついたためだった。この攻撃でイタリア軍は802名の死傷者を出している。

エチオピア中央軍団の崩壊後、イタリア軍はその予先をアビアディに転じ、新たな二正面攻撃を実施した。1936年2月27日0100時、イタリア兵60人がその地域を一望できるウォルクアンバ山へ秘かに登ると守備隊を奇襲し、陣地を確保した。この実に小規模な作戦により、エリトリア軍団全部隊のワリュー峠への総進撃への道が開かれた。イタリア軍の予想どおり、この攻撃は激しい反撃を受けた。ウォルクアンバを奪還しようとするエチオピア軍の逆襲は14回にも及んだが、そのいずれもが百戦錬磨の植民地部隊が夜遅くにアビアディに到達するのを阻止できなかった。続く第3軍団に対するエチオピア軍の反撃は全て大損害に終わっている。彼らはふたつのイタリア軍勢力が予定通りに合流するのを食い止めたはしたが、同地区の守備に充てられていた約5万人のエチオピア人兵士のなか、生き残ったものは2月28日から3月2日までに退却を強いられた。後日、イタリアは第二次テンビエン会戦で新たに8万人のエチオピア人を殺害したと発表したが、彼らもまた死者581名を出しており、うち188名はエリトリア人アスカリー※6が占めていた。

1936年2月28日、2個師団の戦力をもつイタリア第4軍団が砂漠地帯を80km以上進軍した一方、3個師団と1個エリトリア人旅団からなる第2軍団はアドワ—アクスム街道に沿って25km進出した。両軍団が狙っていたのはラス・イムル麾下の現有戦力2万5000人の部隊だった。例のごとくエチオピア側の反攻は積極的で、同日、約6000人の兵士が第19歩兵師団の前衛を待ち伏せ攻撃し、同部隊の前進を4日間食い止めている。イタリア軍が進軍を再開すると、エチオピア軍は再度、本格的な反撃を仕掛けたものの、その結末は今やおなじみの形だった。圧倒的に優勢なイタリア側の火力になすすべなく、数千もの兵士たちが殲滅された。

大損害を出したラス・イムルの部隊はテケゼ川に向かって後退したところで空爆を受けたが、これは焼夷弾が使用された最初の例であった。第3エリトリア旅団による激しい追撃を受け、作戦行動が可能な残存兵力が数千にまで減ってしまうと、もはやラス・イムルは退却するしかなかった。彼の部隊はそれから数日で四散五裂してしまい、3月中旬にはラス・イムルのもとにはわずか数百の兵士が残るだけとなっていた。彼がいくらエチオピア最高の指揮官といえども、これでは侵略者にとって何の脅威でもないことは明白だった。

6 ソマリ、スワヒリ、アラビア語で「兵士、軍」を意味する言葉。ソマリ語では「警察官」を指す言葉としても使われる。アスカリ、アスカリーとも







オガデン州の砂漠地帯に進出するエリトリアのアスカーリ。[Wikimedia Commons]

## マイチュウの戦い

残敵の掃討後、イタリア軍はメケレ—デンシエ街道に沿って第1軍団とエリトリア軍団をもって進撃を再開した。一方、ハイレ・セラシエ皇帝は傘下の残存部隊をアグンベルタ峠付近に集結させ、3月31日、聖ゲオルギウスの日に決戦に挑もうとした。加えて5万5000～6万5000人ほどの兵士が同地に集められたが、これにはアンバアラダムやアビアディで負けた部隊の残存兵、ラス・ゲタチュウ・アパテが新規召集した派遣隊、多数の帝国親衛隊員なども含まれていた。この最後のエチオピア人野戦部隊は以前よりも装備面においては充実しており、機関銃約400挺、少なくとも1個75mm砲兵隊、曲射砲6門、エリコンFF 20mm対空砲数門も備えていた。

イタリア軍の通信士たちはエチオピア軍の通信を傍受していたため、パドリオはこの集結について前もって十分な情報を得ることができた。最後の戦いに挑もうとするエチオピアに対し、彼はマイチュウの町の付近に2本の防衛線を設けて6個師団を配備し、各部隊に強力な要塞陣地を構築させた。最強の3個師団が第1防衛線を守備し、第5山岳師団が右翼を、第2エリトリア師団が中央を、第1エリトリア師団が左翼を固めた。第2防衛線に配置されたのは第30歩兵師団、第4黒シャツ師団、そして第26歩兵師団だ。指揮官全員に「味方の損害を最少にするため逆襲は厳禁」との指示が下され、敵に消耗を強いるよう指示された。

エチオピア人は最初の攻撃を1936年3月31日朝に実施した。以前とは異なり、彼らは多少貧弱ではあるものの正確な砲兵支援を受けることができた。これによりイタリア軍1個砲兵隊が沈黙

すると、エチオピア側による砲撃はイタリア軍の塹壕へと標的を変え、昼前になると防衛線の一点を破ることに成功し、メカン峠を確保した。しかし間もなく第2エリトリア師団がエチオピア軍を銃剣突撃で押し返している。膨大な損害と絶え間ないイタリア軍の猛砲撃、そして数十回もの空襲にもめげず、ハイレ・セラシエ皇帝は午後到大規模攻撃を再び命じた。しかし攻撃を開始したエチオピア軍歩兵部隊は、イタリア人部隊ではなくオロモ族の騎兵隊に側面を衝かれて崩れてしまった。数と物量の優位にもかかわらず、イタリア軍はこの戦いで1273名の死傷者を出し、うち873名がエリトリア人であった。勝敗を決した一大要因となったのが空軍戦力で、これはその後のエチオピア軍の撤退においても猛威をふるうこととなる。1936年4月2日から4日にかけてアシェンジェ湖の岸辺で多数のエチオピア人兵士が空襲の犠牲になり、この2日間に空襲とオロモ族騎兵隊の襲撃によって戦死したエチオピア人の数は、マイチュウの戦い自体の戦死者よりも多かった。

## 南部戦線

南部戦線はエチオピア高原で進行していた戦闘に比べれば余興のようなものと両陣営から思われており、そのため南部での作戦に充てられた戦力は北部戦線のそれよりも少なかった。ロドルフォ・グラツィアーニ大将は本土師団2個を与えられていたが、植民地人で編成された各種正規および準正規部隊、なかでもリビア師団を好んで使用した。大部分が平坦な乾燥地であるオガデン地方は機械化作戦に非常に適していたため、グラツィアーニは必



要な車輛を調達することに尽力。彼の指揮下にはトラック約 500 台、装甲車 27 輛、CV.33 豆戦車 30 輛しかなかったが、間もなくイタリアから新たにトラック 3300 台を受領し、アメリカからはトラック 2100 台とキャタピラー社製トラクター 185 輛を直接買いつけている。

イタリア軍は戦争初期にエチオピアの国境検問所をいくつも制圧してから侵攻を開始していたが、ゴラヘイに向けて戦車と装甲車輛で支援された数個大隊規模による進軍を開始したのは 11 月になってからだった。ゴラヘイの守備隊は約 3000 人で、これには帝国親衛大隊 2 個も含まれていた。しかし数日前の空襲で指揮官が死亡していたため、イタリア軍がその町に到着する前にエチオピア軍部隊は既に瓦解していた。そのためイタリア軍の損害は、1935 年 11 月 10 日の待ち伏せ攻撃による戦車 3 輛だけとされる。その後の南部戦線は比較的平穏で、ヴェヒブ・パシヤ将軍からアドバイスを受けたエチオピア軍は、ハラールを防衛するためデゲハブール地区に要塞陣地を構築し始めた。

1935 年 12 月上旬、ラス・デスタ麾下のエチオピア人兵士約 2 万人（編成後間もない戦闘未経験の帝国親衛大隊 2 個を含む）は、中央エチオピアからソマリ族の町、ドロに向けて行軍した。この 800km にわたる移動後、1936 年初めに彼らはエチオピア・ケニア・ソマリアの国境が交わる地点にたどり着いた。同年 1 月 6 日、ラス・デスタの部隊はドロの手前約 100km のジュバ溪谷に野営地をいくつか設営したが、そこで彼らはイタリア軍偵察機に発見され、繰り返し爆撃を受けることになった。通報を受けたグラツィアーニ大將は火砲 26 門、装甲車輛数十輛、トラック約 700 台に支援された 1 万 4000 人規模の部隊をドロ地区に集結。部隊の配置が整うと、50 機に上る爆撃機でエチオピア軍野営地に執拗に激しい空襲を加えたのち、1 月 13 日に三方向からの攻撃を開始させた。ラス・デスタの部隊は不意を衝かれたのに加え、ジュバ川沿いの土地は平坦でイタリア軍機甲部隊が高速移動するのに最適だったため蹂躪されてしまう。約 3000 人の戦死者を出したのち、彼らはワダララの森へと後退し、防衛線を構築し始めた。

一方グラツィアーニは脅威が排除されたことで満足し、それ以上追撃しないことにした。しかし事態が完全に収束したわけではなく、1 月 16 日にはリビア師団 第 4 旅団のエリトリア人兵士 904 名が脱走すると、国境を越えてケニアに向かっている。動機はおそらく宗教的なもので、問題のエリトリア人たちの多くはキリスト教徒でありながら、同じキリスト教徒であるエチオピア人と戦うことに嫌気がさしたらしい。また、彼らキリスト系エリトリア人が配属されていたリビア師団は、人員の大部分がイスラム教徒だったのだ。ただし同様の事件が再度起きることはなかった。

それから 2 ヶ月余り、イタリア軍の進軍が鈍化したのは豪雨のせいもあったが、ハラール攻略のために 3 万 8000 人の部隊を集結させていたことが主因だ。グリエルモ・ナシ少将率いるリビア師団を先頭に攻勢が開始されたのは 1936 年 4 月 13 日のことで、すぐさまデジャズ・アベベとデジャズ・マコンネン率いるエチオピア人兵士 1 万人からなる軍勢による激しい反撃にさらされた。ダナン地区で発起されたこの反攻は、実はイタリア軍の攻勢の先手を打つ目的で計画されていた作戦であるが、出遅れたことにより機を逸してしまった。3 日間の戦闘後、敵の自動車化部隊に攻略される恐れが生じたため、エチオピア軍は後退を余儀なくされている。4 月 24 日と 25 日にイタリア軍はデゲハブール地区の要

塞防衛線を攻撃し、ヴェヒブ・パシヤの期待に反してこれを易々と突破した。エチオピア軍の数度にわたる逆襲にもかかわらず、結局デゲハブールは 4 月 30 日に占領された。

## アディスアベバ陥落

マイチュウとデゲハブールでのエチオピア軍の敗北は決定的で、これによりイタリア軍は全戦線で進撃を加速することができた。ラス・イムルの残存部隊を追撃するため差し向けられたエリトリア旅団は 3 月末にゴンダール地区に到達していたが、別路で進軍していたファシスト党高官アキッレ・スタラーチェ率いる兵力 3400 人の自動車化部隊の到着を待つため、一旦待機することを強いられた。ゴンダールを占領するのは植民地兵などではなくファシスト軍であるとイタリアのプロパガンダ機関が主張していたため、同地がようやく包囲されたのは 1936 年 1 月 1 日になってからのことであった。その後スタラーチェの部隊はデブラタボールへと進み、この町を 4 月 28 日に占領。一方エリトリア旅団はタナ湖の岸沿いに前進し、バハルダールを占領している。

他方では第 1 軍団が 4 月中旬にデシエを支配下に置くと、バドリオ元帥はアディスアベバへの最後の 400km を進軍する準備に取りかかった。エチオピア侵略作戦の最終段階ともいえる首都侵攻が始まったのは 1936 年 4 月 24 日で、この作戦のために自動車化され「コロンナ・デ・フェレア・ヴォロンタ（鉄の意思の隊列）」と命名された第 30 歩兵師団がデシエを出発した。両側面をエリトリア旅団の精鋭歩兵部隊で固めた第 30 師団が大きな抵抗を受けることなく前進できたのは、エチオピア軍指揮官たちが首都防衛体制を整えることに失敗していたからでもある。事実、アディスアベバ最後の守りを担ったのはエチオピア正規軍部隊ではなく、ホレタ陸軍士官学校の若い士官候補生たちだった。アディスアベバは 1936 年 5 月 5 日に陥落し、その 3 日後に帝国最後の皇帝セラシエは鉄道でジブチへ脱出した。南部ではグラツィアーニの部隊が 5 月 6 日にジジガを、その 2 日後にハラールを占領し、1936 年 5 月 10 日にディレダワでバドリオの北部戦線部隊との合流を果たした。



◀エチオピアを含む 3 地域を支配したイタリア領東アフリカの国旗。(Wikimedia Commons)



▶イタリア領東アフリカの国章。イタリアによる統治は 1936 年から 1941 年まで続いた。(Wikimedia Commons)





## 皇帝の帰還

第二次エチオピア戦争はアディスアベバ陥落と皇帝の亡命によって完結したわけではない。戦場には徹底抗戦を掲げるエチオピア人部隊がまだ残っていた。これが明らかになったのが1936年7月28日のことで、残兵は首都へ潜入して攻撃を敢行したが、イタリア軍守備隊にあっさり撃退された。雨季が終わった1936年10月、イタリア軍はエチオピア軍の残存勢力掃討のため、いくつもの遠征作戦を開始。同年12月18日にはラス・イムルが追い詰められて投降し、ラス・デスタの残存部隊が撃破された。1937年2月19日の戦いが、エチオピア・イタリア間の最後の正規戦となった。しかしラス本人は負傷したものの、追っ手を逃れて脱出している。それ以外にも数千人のエチオピア人兵士たちが脱出し、戦争を生き延び、抵抗を呼びかける指揮官の元に集結した。後年「愛国者」と呼び慣わされることになる彼らは、いかなる形の支援も受けることなく、1941年にイタリア軍が敗走するまで戦い続けたのだ。

そして1936年5月のアディスアベバ陥落以降、占領軍が犯した数々の過ちはエチオピア人からの反感を集め、イタリアによる植民地化を絶対に認めないという風潮が蔓延することとなる。1937年2月19日、アディスアベバの元帝国宮殿前で開催された祝典中に、2名の「愛国者」がイタリア人高官に手榴弾数発を投げつけ、グラツィアーニほか数名が負傷した。

この襲撃がきっかけとなり、エチオピアの民間人に対する大規模な報復行為が始まった。続く3日間のうちに少なくとも3万人がカラビニエリ（イタリア憲兵）、黒シャツ隊、イタリア人入植者らによって即決処刑された事件は、「イカティット12」（太陽暦で2月19日）として知られている。加えて数十名の容疑者が拘留され、裁判後、数週間以内に処刑された。さらに追い打ちをかけるようにイタリア人は3ヶ月後、エチオピアで最も神聖な地のひとつ、デブレリパノス修道院の修道士297名を逮捕、処刑してしまった。その結果、愛国者の数は劇的に増え、国内のほぼ全土で抵抗活動が活発化した。

1938年の3月と4月、イタリア人はゴジャム地方の支配を再

確立するため、戦力6万を動員する大規模作戦を発動せざるをえなくなったが、こうした強硬策の効果は短期間しか続かなかった。その最大の理由が「愛国者」たちが決して統一勢力にならず、個別のグループとして活動し続けていたことにある。それに加えてエチオピア人たちが最終的にゲリラ戦術を選択し、戦力に勝る敵部隊との戦闘を避けたからだ。イタリアの支配下にある主要地域を奪還することはできないが、同時に占領軍の力では支えきれない膠着状態を生み出したのだ。町は全てイタリアの掌中にあったものの、地方の大部分が現地の抵抗勢力によって支配されていた。そのため町と町の間を移動しようとするイタリア軍の車輛は、防御対策を充分施したコンボイを組まなければならなかった。

結局イタリアによる占領は長続きしなかった。イタリアが第二次世界大戦に突入してからわずか数ヶ月後、イギリスはスーダンとケニアに十分な戦力を集結させると、孤立していた東アフリカのローマ属領に対して攻勢を開始した。1941年1月19日、イギ



エチオピアで撮影されたイタリア軍の豆戦車。(Wikimedia Commons)



フランス製のオチキス M1914 機関銃を試射するセラシエ皇帝。(Wikimedia Commons)



リス軍2個師団がエリトリアに突入し、長く凄惨な戦闘ののちイタリア軍をケレンで破ると、4月1日にアスマラを占領した。一方、ケニアからソマリアへ1月24日に出撃したもうひとつの部隊はモガディシュとハラールを占領後、1941年4月6日にアディスアベバに到達した。

大事なことをひとつ言い残したが、高名なイギリス軍人オード・ウィンゲートに率いられた小規模な混成支隊（イギリス人だけでなく、イギリス人から訓練を受けたスーダン人やエチオピア人の兵士もいた）がハイレ・セラシエ皇帝を伴って1941年1月20日にエチオピア入りしている。「ギデオンフォース」と名付けられたこの部隊は、はるかに大規模なイタリア軍部隊を知略と奇策を用いて出し抜き、同年3月4日にブレを、4月3日にデブラマルコスを解放。その後は真っ直ぐ首都へ向かうと5月5日に到達し、皇帝はついに凱旋を果たしたのだった。



首都アディスアベバに入るオード・ウィンゲート（馬上）  
(Wikimedia Commons)





ISBN978-4-499-23349-1 C0076 ¥4500E

定価(本体4,500円+税)



9784499233491



1920076045004



# ERITREAN WARS

